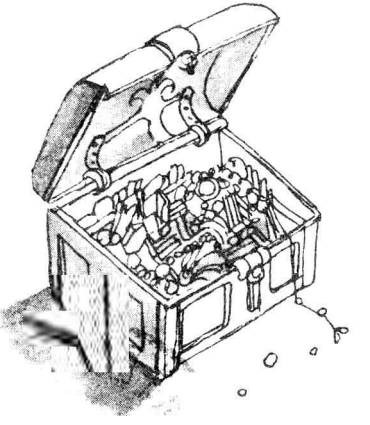
絶　壁

絶　壁

多岐川　恭



毎日新聞社

絶壁

〔著者との申し合わせにより検印を省略します〕

昭和三十六年十二月十五日　初版

定価三〇〇円

著者　多岐川恭

発行者　高木金之助

印刷所
製本所　中央精版印刷株式会社

発行所　毎日新聞社

東京都千代田区有楽町一の一一
大阪市北区堂島上二の三六
門司市清滝町一の九〇二
名古屋市中村区堀内町四の一

© 1961, Kyō Takigawa　　Printed in Japan

目次

旅人……三
市長の話……二〇
黒い手……二六
悪魔の笑い……五三
おそろしい訪問……七〇
三人組……八七
追跡……一〇四

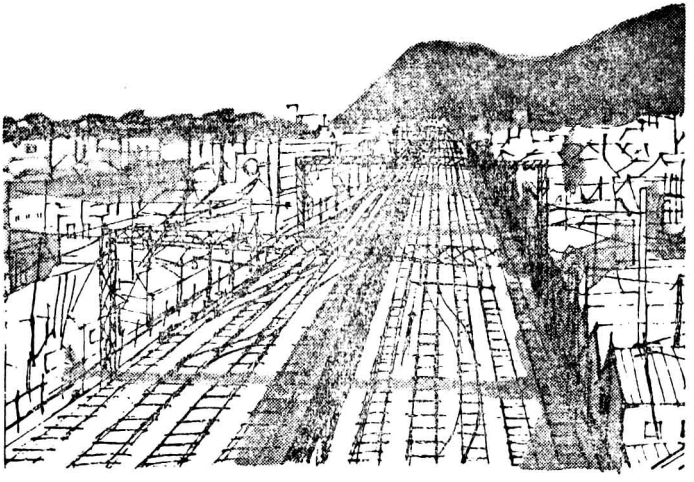
時が迫る……一三
網をしぼる……一五
Xの攻勢……一五
圭子の危機……一七
夏樹の発見……一八
最後の脅迫……二〇
水平線……二九

装本・さし絵　池田仙三郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

絶

壁



旅人

午後の普通列車はガラあきだった。ここ、一等車では、乗客は全部で四、五人しかいない。うららかな陽ざしが、西側の窓から、いっぱいにさしこんでいた。

座席をひとりで占領した男が、長い足をのばし、腕を組んで、のんびりとうたた寝をしている。列車がガタッとゆれると、うす目をひらいて窓の外を見、また気持よさそうに目をとじる。すぐにスウスウと寝息がもれだした。

東海道線の、箱根をやっと越えたところだ。急が

ない旅なのだろう。黒っぽいジミな服装で、役人かサラリーマンのように見える。年は三十二、三才くらいか、ガッシリしたからだつきで、顔は日焼けしている。網棚にのっているのは小さなスーツケース一つ。

ドアがあいて、若い男がはいってきた。ソッとドアをしめ、キョロキョロと車内を見まわす。少ない乗客は、それぞれ本を読んだり、ぼんやり景色をながめたりしている。

若い男は、そろそろと通路を歩いてきて、うたた寝をしている男のそばに立ちどまると、ニヤリとした。

網棚に手を伸ばしたが、客は相変わらず眠っているようだ。そのようすをうかがいながら、若い男はスーツケースを取りあげた。おそろしくノッポなので、そういう動作はかんたんである。自分を注目している者がないのをたしかめると、彼はスーツケースをぶらさげて、そのまま離れようとした。

ところが、からだが動かないのだ。ギョッとしてふり返ると、客がニコニコして、彼の上着のすそをつかまえていた。

「このやろう、離せ！」

若い男は青くなった。大声でさわぎ立てられるより黙ってニコニコしていられるほうが気味がわるい。

「返しゃいいんだろう？　返しゃ……」
「まあ、急がんでもいい。ここにすわりたまえ」
客はそう言うと、グイッと引きもどした。大変な力だ。若い男はよろけて、向かいの座席に、ペタリと腰をおろしてしまった。
「ねえだんな、出来心なんだ。見のがしてくださいよ」
若い男は戦法を変えて、おがみ倒しにかかった。
「そうはゆかん。君はえらんだ相手がわるかったんだ。ぼくは警視庁のものだ」
「へっ？　サツのだんなで！」
若い男は目を丸くした。
「そんなに見えなかったんだがなあ。そんなら仕方がねえや」
二十才になるかならないくらいの、どことなくまだ、こどもらしさが残っているような男である。すっかりあきらめたらしい。
「どうだ、助かりたいか？」
客は、いまどきめずらしいヒゲをはやしている。おだやかに笑った。
「助けてもいいが、条件があるぞ」

「条件ですって？　見のがしてさえもらったら、何だってやりますから」
若い男はパッと顔を輝かした。
「そうか。まず、スーツケースを棚に置きたまえ。条件というのは、むずかしいことじゃない。ぼくの手足になってくれたらいいんだ。つまり、助手だよ」
「助手！　そりゃもう、喜んでやりますぜ。ぼくの名前は、沼田三七ってんです。三七二十一の三七なんです。まだかけ出しで」
「かけ出しはいいが、もう悪いことはやめるんだな。もっと大きな仕事を手伝ってくれ。手当は十分に渡すつもりだから」
「手当なんて…」
沼田は、相手を見守った。
「ぼくはだんながすっかり気に入ったんだ。度胸のある人だね。手当なんていりませんよ……警察の仕事ですか？」
「そうだ。ぼくの名は姫野百合夫、警視庁捜査課の刑事なんだがね。これから、ある事件をさぐりに行くところだ。なにしろ、警察はいそがしいものだから、こんな事件に、警視庁から何人も人をやるわけにはゆかん。だから、だれか助手がほしくてならなかったところだ。ちょうど君が、スーツケー

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

スを失敬しにきてくれたので、助かったよ」
「もうそのことは、かんべんしてくださいよ」
沼田は赤くなった
「で、どんな事件なんです？」
「その前に、ぼくの助手として忠実に働くこと、決して裏切らないこと、スリやかっぱらいのようなマネはしないことを誓うんだ」
そう言うと、姫野刑事の顔が、これまでの人のよさそうなニコニコしたようすから、急にきびしいものに変わった。底の底まで見とおすような、するどい眼光だ。沼田三七は背すじがジーンとしびれるような気がした。
「ち、誓います。ぜ、絶対です！」
「よろしい」
姫野刑事は、またもとの、のんきそうな顔つきにもどった。
「行先は、あと三十分ほどで着く、大川原市だ。人口七万くらいの、小さな市だがね、そこの市長の、福塚正人という人が、だれかに命をねらわれている。ぼくは少し、心当たりがあるので、志願して、現地の警察に協力して市長をねらう男をつかまえることになったのだ。と言っても、ぼくは市長

に会ったこともないし、手掛りはなにもない。すべてはこれからだ。当分、大川原に滞在することになるだろうが、君はかまわないかね?」

沼田はつばをのみこんで、大きくうなずいた。

「ぼくはどこにいようが、ちっともかまわねえんです。天にも地にも、たったひとりですからね。で、心当たりってのは?」

「それは、むこうに落ち着いてから話す」

姫野刑事はまた腕組みをして目をとじた

ゴトン、ゴトンという眠そうなひびきが間遠になって、普通列車は大川原駅のホームに着いた。おりた人はほんの四、五人。そのなかに姫野刑事と、沼田三七がまじっている。

「ガランとした駅だねえ、だんな」

「だんなはいかんな。先生とでもいったほうが助手らしい。これから助手らしい態度をとらなきゃいかんぞ」

「はい、わかりました、先生」

姫野刑事は、いつの間にかサングラスをかけている。短くかりこんだひげのせいか、ちょっと日本人離れがして見える。背はもちろん、沼田のほうが高いが、肩幅が広く、堂々としている。

「先生、迎えの人はいないんですか？」
と沼田が聞いた時に、渡り廊下の階段から、ふたりの制服を着た警官が、小走りでやってきた。
「警視庁の姫野刑事殿ですか？」
「そうです。これは、助手の沼田という者です。どうもご苦労さんです」
姫野刑事は礼をいった。
「お待ちしていました。この方は、助手……」
「ええ、まあそんなようなものですがね」
姫野刑事は笑った。
「実は親類の者で、まだ学生ですが、犯罪捜査に興味をもっていましてね。ぜひにというので、連れてきたんです。よろしくお願いします」
沼田もピョコンと頭をさげた。警官たちもあいさつしたが、へんなやつだと思っているらしい。
駅前に、警察からまわされた車が待っていた。乗り込んで、すぐ出発。大きな建物がないので、広い駅前通りは、いよいよ広く見える、商店や、銀行の支店がならんでいて、ポプラの並木がつづいたむこうに、白い雪をいただいた富士山が、遠くポッカリ浮かんでいる。右にまがると、官庁街だ。新しい鉄筋コンクリート造りの市役所を中心に、警察署、消防署、税務署などがある。

車は大川原警察署の、玄関前に横着けになった。灰色にくすんだ、古い建物である。なんとなく陰気で、いかめしい。

「ああ、いやな感じ……」

と沼田三七がつぶやいた。これまでの商売が商売だから、警察がニガ手なのも無理はない。

署長室に通されると、金ぶち目がねをかけた、でっぷりした署長が、立ち上がって迎えた。沼田は姫野刑事のうしろで、小さくなっている。

「さあどうぞ。わざわざ来てもらうこともなかったんですが……」

署長は「後藤兵一郎」という名刺をさし出しながらいった。協力を感謝しているようだが、ありがためいわくだといっているようにもとれる。ほんとうの気持は、よくわからない。

「実はね、姫野さん。市長が何者かに命をねらわれていると言うけれども、これまでさんざん、市長の身辺を警戒したんですが、一度だってそのような事実はないのですよ。ところが市長は、いやたしかに、だれかがねらっていると言い張っているんです。私は断言してもいいんですが、これは市長のノイローゼですよ。ありもしないことを信じこんで、ビクビクしているんですな」

「ほう。そういう事実はまったくないとおっしゃるんですね?」

姫野刑事はひどく興味をひかれたようだった。

「すると、市長がノイローゼになった原因は何ですか？」
「それがわからんのです」
後藤署長は、いまいましそうに舌打ちをした。
「なにか身に覚えがあるからこそ、おびえるんですからな。うしろ暗いことはない、ないの一点張りで、これでは、せっかく市長のために骨を折ろうとしているわれわれとしては、頭にきますよ。そういう状態ですから、いまのところ、われわれは手を引いて、成り行きを見ているありさまです。ま、あなたが市長にお会いになれば、わかりますが……」
「そうですか。なかなかやっかいな人間のようですね」
だが、姫野刑事は、痛くもかゆくもないような顔つきである。
「とにかく、会ってみましょう。ぼくは市長のことは少しも知らないのですが、どんな経歴の人ですか？」
「福塚さんは、たしか土地の人ではないです。戦後に大川原市に移住されたんですが、その前は召集されて、戦地を転々としていたようですね。私が本人に聞いたところでは、太平洋戦争では、中国とマライにいたそうです。終戦になってから、どこかにかくれていて、捕虜にならずにコッソリ内地に帰ったらしいですね。そんなところを見ても、なかなかくえない男ですよ」

「なるほど。郷里はどこなんでしょう?」
「さあ……」
と、後藤署長は首をかたむけた。
「いろんなところにいたようですが、くわしいことをお知りになりたいなら調べさせますが……」
「いやいや、それには及びません。直接お会いしたほうが早道ですから」
姫野刑事は沼田を目顔でうながした。
「なにかとお世話になると思いますが、よろしく」
「できるだけご便宜を計ります。宿舎のほうは、市役所のほうでなんとかしてくれると思いますから」
ふたりが出て行くのを、後藤署長はうす笑いを浮かべて見送りながらつぶやいた。
「警視庁にも、ひまな男がいるもんだ。どうせ手ブラで帰るのがオチさ。しかし、なんで市長の事件を手がける気になったんだろう?」
市役所の受付に行くと、女の子がうさんくさそうに、あまり身なりのパッとしないふたり連れをながめた。
「市長さんに、警視庁からまいりましたと伝えてください」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com